
コギトの雨

海老

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コギトの雨

【Nコード】

N3507P

【作者名】

海老

【あらすじ】

命の光を陰らせる意思”プラトーン”の侵蝕が広がっていく大地。渇いた世界に逞しく生きる人々と、少年スムの想いの力を巡る物語。

一、コギトとの旅路

僕達は今、もうどこまででも続いているというように、ずっと一面の赤土あかつちの上を、何日も何日も二人ぼつちで歩いていきます。

草も木もほとんど生えていないし、何か生き物があるでもない。

？昨日も、一昨日おとといも同じ景色を見ていたようで、なんだか頭がぐるぐるとなります。

コギトはあまりおしゃべりをしませんし、端整たんせいな顔立ちかおだとスラリとした身体からだに似合わず、とても屈強くつきやうなお兄さんですから、どんどんと行ってしまえばかりで、それらと暑さとで僕はすっかり気が滅入めいってしまふのです。

二つ前の冬におじいさんが、お前ももう十とおになると言っておりましたから、僕ももう十二くらい。それなのにコギトの足には、まだ全然ついて行けないのです。

前まで立ち寄っていたカザリゼの街では、しっかりしているだとか、頑丈がんじやうで良いだとか、殊更ことさらにに賢いだとか、宿にいた大人の人達にたくさん誉めて貰もらったばかりなのに。

しかしもちろんコギトは心根こころねの優しいお兄さんですから、時々大丈夫だろうかという顔でこちらを伺い、僕を気に止めてくれます。？そして今度も俄にわかに足を止めこちらを振り返りましたが、なんだかいつもよりも穏おだやかな顔をしておりました。

「ごらん、スム。ここまでくれば君にも見えるだろう。ちょうどあの岩の右の向こうに白く何か見えやしないかい。あれが次の街だよ。」

コギトが優しく言いました。けれども僕はコギトのところまでずんくらずんくらとなんとか辿り着くと、それはもう本当にくたびれた声で、なんともむすつと可愛げなく答えました。？

「僕、やつと見えたのは本当に嬉しい。でもコギトには見えていたなら、何故もつと早くに教えてくれなかったのさ。」

コギトは僕の反応が意外であつたとみえて慌ててこちらを見下ろします。

「ああ、すまなかつた。けれど、前に街が見えたと話した時は、全然見えないとスムは怒つたろう。それだから今度は、スムが見えるくらいまで黙つておいたのだけれど。」

「コギトは目が良すぎるんだ。前の時はコギトが見えたと言つてから、僕が見えるようなるまで一時間も歩いたじゃないか。」

コギトは少し困つた顔をして、黙つて僕の頭を二、三べんサラサラと撫でました。そうして一呼吸おくと、続いて先程よりも随分低い声で言いました。

「この地域は昔からプラトーンの浸蝕が激しかったけれど、また随分と進んでしまった。以前はカザリゼからあのアイーダの街との間に、幾つか集落があつただけだ。」

そう言うコギトは、しゃがみ込んでまるで死んでしまったように見える大地の土を一掴み取り、その塊を指でボロボロと崩しました。

「渴いてしまつてゐる。人も大地も。」

何もない二人だけの大地にさみしく風が吹き抜け、その土くれをさらつていきます。

「何故、どうしてプラトーンは広がっていくの。いつかおじいさんと住んでいた、僕の街にも来てしまふのだろうか。」

黙り込むコギトに、僕は少し不安な気持ちで聞きました。

「プラトーンとは意思だ。憎しみか、或いは過度の文明を持ち過ぎていた人間という種の自らを抑制する本能か。それを止めるのは難しい。このまま空も大地も人も全て渴いて世界が終わつてしまふのか。それは誰にも分からないんだ。」

いつになく厳しい表情のコギトに、僕はなんだか怖いような気持ちになりました。

それを察したのか、コギトは珍しく少し声に力を入れて、励ますように言いました。

「大丈夫。世界中でプラトーンの研究は進んでいる。この渴きにも
きつと終わりは来るよ。」

コギトはまた、僕の頭を優しく撫でました。

「僕、本当にそうだといい。」

コギトの顔を見上げると、僕には何故だかその顔がどこか淋しそ
うに見えたのでした。

「さあ行こう。もう少しだけ頑張っておくれ。」

そう言ってコギトは顔を前へやると、何かを見つけた様子で言
いました。

「見てごらん、こちらに何かやって来るよ。」

すると街の方でキラリと何かが光ると、ホバーらしき乗り物が音
もなくこちらに向かって走って来るのが見えました。

「コギト、あれはホバーのようだよ。なんて立派で速いんだ。僕、
本物ははじめてだ。」

僕はプラトーンの事はすっかりいいにして、ホバーに夢中になっ
ておりました。

再び歩き出して暫く、ああ、あんな乗り物があつたらどんなに楽
だろうかと思いつくにか調達する方法を一人であれこれ思案してお
りましたが、やっぱりどうにも高い物ですから、今のままではな
あ、ちらりとコギトの顔を盗み見たりしておりました。

すると、先程のホバーらしき乗り物がみるみるこちらにやって来
て、目の前ですうっと止まりました。

「どうも、旅の方。方角からして、カザリゼからいらつしやいま
したか。」

ホバーに乗っていたのはいかにも腕っ節のある逞しい男性でした。
「どうも。そうです。カザリゼから参りました。」

コギトが丁寧に答えます。

「歩いてとはたいへんだったでしょう。この辺りは暑さも厳しいで
すから。時に旅の方、カザリゼからこちらの方に、あのマクスウェ
ルの魔物が向かったという噂を聞きました。危険ですから街までお

送りしましょう。あ、いや、これは失敬、私はアイダの護衛を任
されているものでして。」

ホバーの人は跨がったまま、ゴーグル付きの帽子を取ってペコリ
としました。

「そうですか。それは暑い中ご苦勞様です。本当にお心遣い感謝い
たします。しかし私達は、歩いてアイダまで参ろうかと思えます
ので、どうか護衛のお仕事にお戻り下さい。」

コギトはまた丁寧な口調で言いました。

「ご修行中か何かですか。ご立派な事です。しかしマクスウエル
の魔物の力は恐ろしく、目で見ただけで人を燃やしてしまうと言
います。先日のカザリゼではたいへんな騒ぎだったようです。くれぐ
れもお気をつけ下さい。では。」

護衛の男性はヒラリとホバーの先頭を向き直すと、街に取って返
して行きました。

男性の姿は瞬く間に小さくなり、いつしか何処かに見えなくなり
ました。

「すまないね、スム。」

コギトが淋しそうに笑って言いました。

「大丈夫だよ。もうすぐそこなのだし、ここまで来たら自分の足で
着きたいもの。」

本当はあのホバーのようなのに乗ってみたい気持ちもありました
が、コギトはなるべく人と関わらないように旅をしておりますし、
カザリゼでの事もありましたから、仕方のないことなのでした。

「よし、僕、コギトよりきつと早くに着くよ。」

僕はわざと大きな声で言うと、さっきより随分と元気良く歩き出
しました。

暫く歩くとやはり頭がぐるぐるしましたが、さっきまでより幾分
良いと思えました。

二、アマンダとの再会

アイーダの街は決して裕福ゆうふくではないけれども、遺跡いせきの発掘はっくつと研究が盛さかんであるとある時コギトが言っておりまして。けれど研究者以外の人影もあちこち少なくはなく、この土地の厳しい環境の中でも街の人々は懸命けんめいに生きているように思えました。

こういった貧しい街や村は、世界中にはまだまだたくさんあるとコギトは言います。

何百年も前は世界中があのにライカナイとか、エゾとか蓬萊ほうらいとか呼ばれる小さな島の噂うわさみたいにな、もつと緑や水が豊かで雨も一ヶ月のうちに何日も降ったらしいのです。

プラトーンの浸蝕しんしょくがはじまって今みたいになつてしまったのは、大きな戦争のせいだとか、星の寿命じゅみょうのせいだとか色々な説があります。アイーダはそんな”大きな戦争説”を唱となえる偉い学者えらさん達が、この土地の地下に多く見られる遺跡を発掘されているそうなのです。

遺跡きせきには旧世界きゅうせかいの文明がたくさん眠ねっていて、その研究と実用化が進められているのですが、あまりの技術の差にほとんど手が出せないというふうらしいのです。

アイーダの警備の方が乗っていたあのホバーのような乗り物も旧世界の文明の一端いったんで、電気的な力で駆動くどうする物だったため今ではすっかり実用化されておりまして。けれどもそれを生産する技術は今はまだないといつか本で読んだのです。

その本によりますと、旧世界では空を飛ぶ乗り物さえたくさん造つくられていたと言います。あの空を飛べたらどんなに素敵だろうと、僕はその本を読む度に随分と思いました。

ですからせっかく遺跡の研究所のあるアイーダに来ておりますので、学者さんのお話を少しでも聞けたら良いと、実はなんだか少し期待するような気持ちでございました。

コギトは旅の目的である人探しの有益な情報が、どうやらこの街にはあると見て訪れたようです。交易のあまりないアイダに、手掛かりがあるようには僕にはどうにも思えないのだけれど。

「まずアマンダという女性に会おう。」

街の入口をくぐるとすぐに、コギトはそう言いました。

「とりあえず少し休みたいのだけどダメだろうか。」

僕はまさかこのまま一休みもせず行くのかと少しぎょっとして言いました。

「ああ、もちろんそのつもりさ。すまない、少し気が急いってしまったね。スムはよく歩いてくれたから、まずは先に宿に行こう。彼女に会いに行くのは食事の後でも良いのだし。」

僕はふうつと胸を撫で下ろすというような心持ちを、コギトにはなるべくわからないようにお腹の辺りにじんわり留めました。

コギトは汗もかかないしあまり疲れたりもしないものですから、時々僕には必要な休憩という大切な事柄を忘れてしまう事がありますので、今度もそれじゃあなかるうかと思ったのです。けれどもどうやら違うと安心しましたので、早速次の質問です。

「アマンダさんはどういう人だろう。初めて聞く名前だけれども、いったいコギトは知り合いなの。」

「アマンダのお父様が恩師でね。彼女は小さな頃から知っているという訳さ。随分立派な学者さんになったと聞いているよ。」

コギトはなんだか嬉しそうに話しました。

「では早く会いたいと思うのは当たり前だね。けれども、ごめんなさい。やっぱり少しだけ休ませて欲しいです。僕、疲れてしまったみたいで。」

僕はコギトが減多にしない昔の話をしてくれたのも嬉しかったし、本当に懐かしいというふうな顔を見て、ああ、早くにアマンダさんという方に会わせてあげたいと思いました。どうにも本当にクタクタだったのです。

「ありがとう。スムは優しい子だね。本当にそう思うよ。おじいさ

んが良くお育てになられたようだ。ではもう宿へ行こう。僕も今日はお水をいただくかな。ああ、僕はそこで場所を聞いて来よう。」

コギトはそう言う道脇のお店に入って行きます。何のお店だろうと目を凝らしましたが、屋根から太陽光発電のパネルから看板まで、日照りと土埃のせいか色がぼやけて文字がよくわからなくなっていました。

しかしコギトが水を飲むなんて、本当に珍しいのです。いつだって食べ物は一切食べませんが、ごくほんの時々水を飲む時は、いつも何か嬉しそうな時のように思えます。ですから今度もそのアマンダさんに会えるのが、よほど嬉しいのじゃないかなと思うました。

「待たせたね、スム。あっちだそうだよ。」

そう言ってコギトは、真っ直ぐに街の真ん中の方へゆたりと歩きました。

暫く行くと、街の半分から向こうの方に大きな建物と色々な形の掘削機が見えて来ました。

「あれが彼女と彼女のお父様の作ったラボラトリだよ。宿はその向こうだそうだよ。」

僕はなんだかドキツとしました。だっていくら立派な学者さんでも、まさかこんな大きな研究所を持っているなんて思いもよらなかったのです。

僕は俄かに緊張して、なんだか疲れが駆け足で何処かへ行ってしまうたというふうでした。

「どうだい、スム。君は学者さんを目指しているのだから、こんな大きなラボラトリを見ると、やはり気持ちが高飛んだようだろう。アマンダに頼んで中を見学させてもらうといい。」

コギトはきつと僕を驚かせようとわざと黙っていたのだと思いました。

すると研究所からこれから発掘現場に向かうというような格好をした、美しい女性が出てきました。

女性はこちらを見て、目を円くして言いました。

「その旅の方、もしかコギトじゃありません。」

コギトは突然の事で何だか分からないという顔をしましたが、すぐに落ち着いた声で言いました。

「やあ、アマンダ。本当に久しぶりだ。随分と美人になったね。」

コギトの言葉で僕もすぐに女性がアマンダさんであるとわかりましたが、二人の再会の邪魔じやまになつてはいけませんのでそつとして黙っております。

「やっぱりコギトね。本当に久しぶり。前より顔色が良くなったみたい。安心しました。でも美人になったただなんてあなたらしくない物もの言いですこと。お父様がいなくなつてからは発掘作業の現場にも顔を出さなきゃなくなつたからお肌が随分と荒れてしまつたし、盗賊とうぞくが増えたせいで良い化粧品けしょうひんもなかなか取り寄せられないわ。」

アマンダさんは少ししまいったような顔になりました。

「そうか。それは苦勞くるわうをしているね。しかし身心しんしんも充実じゅうじつしているというふうだ。そう見えたから美しくなつたと感じたのだけれど。」

アマンダさんはほんのしばしキョトンとした顔をしましたが、すぐにクスクス笑うと続けて言いました。

「そうね、ごめんなさい。やっぱりとてもあなたらしいわ。また会えて本当に嬉しい。歓迎します。アイーダへようこそ。ではそちらの子をご紹介いただけるかしら。」

「スムです。スムと言います。」

僕はコギトが何か言い出すか言い出さないかの間まに、変かに畏かしこまつて大きな声で言いました。

アマンダさんがすごい学者さんでらつしゃるという事とても美人だったのとで、僕はもうなんだか本当にすっかり緊張しております。

「まあ、元気が良い。男の子ですものね、そうでなくっちゃ。コギトもスムを見習ほほえわなくちゃね。」

コギトは困つた顔で少し微笑ほほえんでいます。

僕はその様子を見て声を出して笑いました。それはアマンドさんに誉められて少し得意になっているのもありました。が、いつもどこか淋しいような悲しいような顔をしているコギトが、カザリゼの一件以来更に元氣のないように見えていたのです。それが今日はなんだか特別楽しそうでしたので、僕も一緒になって嬉しくなっていたのでした。

「ああ、アマンド、宿はどちらかな。」

コギトがちらりと僕を見て切り出しました。

「ラボの向こう側よ。案内します。宿というより、ラボの研究員のための宿泊施設を一般の方にも宿として利用していただいているものだから、あまり期待はしないでね。でも口を利いておきますから、自由にお使いになつて。」

「ああ、本当に助かる。ありがとう。一部屋お願いするよ。僕達はスムが休まればそれで良いから。」

コギトは小さく会釈をしながら言いました。

するとすぐにアマンドさんが、優しく笑って言います。

「気になさらないで。ちゃんとコギトも泊まれるように二人部屋を用意しますね。でもスム、コギトと一緒にじゃあ色々疲れちゃったでしょう。この人、真面目なのは良いのだけど冗談の一つも言わないのなもの。」

ああ、アマンドさんは、きっと僕よりもコギトの色々な事を知っているのだなと思いました。

「アマンド、それくらいで堪忍しておくれ。それより君、お仕事はいいのかい。発掘作業をする格好に見えるけれど。」

コギトは話を逸らすように言いました。

「あら、こんなに特別なお客様を放っておいて掘り起こす物なんてあるものですか。それにこう見えても、ここでは私が一番偉くてよ。」

アマンドさんはさも得意そうに言いながら歩き出しましたが、なんだか嫌味が全くなく、その真っ直ぐな心根が窺えるようでした。

「ではお言葉に甘えて。」

コギトがまた小さく会釈をしながら歩き出しました。

大きなラボを横切つて宿に着くと、今まで立ち寄った幾つかの街のどの宿とも、それ程の差のない建物がポツリと建っていました。

「では少しお待ちになつて。食事の用意もすぐに出来ますから。」

アマンドさんはそう言つて二コリとすると、建物の中に僕達を招き入れました。

中に入ると、宿の利用者やら係の人やらが次々とアマンドさんに挨拶をしました。アマンドさんはその一人一人に、同じように笑顔で接します。挨拶を返したり労つたりしながら、偉ぶるでもなく自然に奥へ進んで行きました。

そしてフロントのヒゲを生やした男性に事情を話し、部屋へ案内するよう言いつけると、自分は腕まくりをしながら厨房らしき奥の方へ入って行きました。

僕はアマンドさんが美しいやら格好良いやらで、なんだかポカンとしてしまいました。

「さあスム、どうしたんだい。」

はっと我に帰ると、もうコギトは先程のヒゲの男性に連れられて、部屋へ行こうと階段の木の手摺りに手をかけていました。僕はすぐに駆け寄つて、コギトが代わりに持つてくれていた僕の荷物を受け取ろうとしましたが、黙つて頭をポンポンとやられました。

部屋へ入ると、コギトはベッドの横に荷物を降ろし、砂避けの口―ブを脱ぎ、また荷物の上に軽く畳んで置きました。いつも通り僕も同じようにすると、なんだか急に疲れたというふうに、ずしりと身体が重くなったようでした。

靴を脱いでそのままベッドへ倒れ込むと、コギトと何か数言交わしているうちに、僕はいつしか眠つてしまっていました。

三、スムとアマンダ

ここはどこだろう。商店の立ち並ぶ、豊かな街並。

ああ、ここはきっとカザリゼだ。

一面はずつと雨。さっきから雨が降っていたんだ。

おおい、みんな雨だよ。

なんで、どうして誰もいないのだろう。こんな雨、滅多めったにないというのに。

おや、遠くに誰かがいる。

ああ、あれは、間違いない。コギトだ。

こんな雨の中、びしょ濡れで何をしてるのだろう。

コギトの向こうで何かが赤く光っている。

何かが、燃えているんだ。

あれは

人だ。

「スム、起きてスム。もう夜になってしまっわよ。」
ふぁっと突然景色が変わり、どこかでアマンダさんのやわらかい

声がします。優しく愛情に満ちた美しい声です。

うつとりするような、どこまでも落ち着くような、なんとも言えない穏やかな気持ちで、僕はその声に耳を傾けます。^{かたむ}

そうしていると右の肩の辺りを小さく揺^ゆえられる感覚が、徐々にはつきりとしてきました。

「スム、さあそろそろ起きて下さいな。」

すうつと頭に血が通ったような感覚の後、ああ、どうやらすっかり眠ってしまったのだと気付きました。

僕はのつたりと目を開けると、そこにはもうすぐにこちらを覗^{のぞ}き込むアマンダさんがおりました。そしてその顔があんまりに綺麗で、僕はドキリとして我に帰りました。

「ごめんなさい、僕眠ってしまったのですね。」

ゆっくり身体を起こすと、アマンダさんはニコリとしています。
「歩き詰め^{づめ}だったものね。起こしてしまつてごめんなさい。」

そう言つてアマンダさんは立ち上がり、窓をガチャリと開けました。

「こんな場所でも夜の風は気持ちいいわ。食事の間こうしておく、寝る時にはシーツが冷えて気持ちがいいの。」

辺りはすっかり真つ暗で、窓からは薄い金色の月と星の光が、音もなく降りて参りました。

「僕、随分寝^{すいぶん}てしまつたみたいです。そうだ、コギトはどうしましたか。」

「そつえば姿が見えません。」

「コギトは出掛けたわ。ゲルニカ山脈を越えた先まで行くものからです、もう当分は帰つて来られないの。黙つて行つてすまないって。」

僕はびっくりしてベッドから飛び起きました。

「そんな、ひどいや。いったいどうして行つたのですか。それにコギトは帰るまで僕はどうやっていよう。」

僕はひどく泣きそうになりました。

「そんなに慌あわてなくてもちやあんとコギトと話してありますよ。行き先は少し複雑な事情だからまた明日ゆっくりお話しするとして、コギトが帰るまでスムには私の助手をしてもらいます。しっかり勉強するのよ。だから暫しばくはここがあなたの部屋ね。」

アマンダさんはニツコリと笑いました。

アマンダさんの言うそれは僕にはもうたいへん喜ばしい事だったのですけれど、寝ばけた頭に突然たくさん感情がどっかり押し寄せたものですから、なんだかもう自分でも訳が分からないというふうでした。

僕がフラフラとしながら、なんとかよろしくお願いしますと捻ひねり出すと、アマンダさんはこちらこそとペコリとしました。

ああ、本当にいい人です。

「ねえスム、あなたコギトの事で色々と気になってるのじゃないかしら。何故本人に聞いてみないの。」

アマンダさんは木の椅子いすに腰掛こしかけると、少し低い穏やかな声で聞きました。その目は真っ直ぐに僕を見ています。

僕は本当の事を話さなければいけない気がしました。

「僕、気になる事ならたくさんあります。でもコギトは、それを聞いたらきつと悲しい目をする。嫌なんです、コギトがこれ以上悲しそうになるのは。」

僕は本当にそう思いました。

「そう、優しい子ね。コギトはあなたと一緒にできつと良かったわ。でもこの先彼と一緒にいるのなら、あなたは知らなければならぬ。彼もここを出る前にそれを望んでいたわ。」

アマンダさんの目まだ真っ直ぐでした。

「本当は聞くのが怖いです。でもアマンダさんは全て知っていて、コギトに普通に接しているのですものね。」

僕はアマンダさんの視線を避さけるようにうつむいて言いました。

「そうねえ。昔は恋まゐだつてしたわ。」

僕は俄にわかに目を円まるくしました。

「コギトにですか。」

「そうよ。でも彼、ああいう人でしょう。気付きもしなかったわ。まさか自分に恋心を抱く人間がいるだなんて、夢にも思わないのでしよう。まあ昔のお話ですけれど。」

アマンダさんは淋しそうに笑います。

僕はアマンダさんのように、大好きなコギトの事をちゃんと知りたいと思いました。

コギトがいったいどんな思いで生きているのか。その思いに、僕はどう応えられるのか。

「コギトの事、教えて下さいますか。」

僕はたいへん勇気を出して言いました。するとアマンダさんは、どこか今にも泣き出しそうというふうな顔で言いました。

「ええ。ええ、勿論よ。ありがとう、スム。」

アマンダさんは僕の頬にそつと手を触れて、小さくコクリと頷きました。

「でもコギトの事を話すのには、本当に時間が必要な。明日、行き先の事と一緒にゆっくり話すわ。だからその前に、カザリゼで何があったのか聞かせてくれないかしら。話してみたら、少し楽になるかもしれないわ。」

僕はしばらく黙っておりましたが、アマンダさんの目を真っ直ぐに見て言いました。

「わかりました。」

そして膝を抱えて窓の方を見ながら、ゆっくり、ゆっくり、カザリゼでの出来事を思い出したのです。

四、カザリゼの街並み

港が近く、大規模な太陽光発電施設を有するカザリゼは、最大の交易の街として世界中で知られていました。

海の向こうで生産されている、バギーなど大型電化製品の卸売で、街の経済は非常に安定しています。

それはバッテリーの性能が向上したことで、カザリゼの南に位置するアイーダを除く六つの街まで、通常のバギーでも充電が持つようになったからだといえます。

アイーダまで充電する事なく運行出来るのは一部の超大型バギーだけで、その運行は充電に膨大な電力がかかる事から、今ではほとんどされてないそうです。

そしてカザリゼのもう一つの特徴は、未だプラトーンの影響をほとんど受けていない事から、食物や木材など、有機的な資源が豊富な事でした。

コギトはむしろこの事が、街の潤いと呼んでいると考えていました。

「食物が豊富だと言う事は、そこには命がたくさんあるという事。

命と命は惹かれ合い、連鎖するものなんだよ。」

カザリゼの街の豊かさと、あまりの人の多さに呆気にとられている僕に、コギトは諭すように言いました。

ここはカザリゼの入口広場です。

「己の命を別の命に繋いでいく事。それがこの星に命の光が宿った瞬間から脈々と受け継がれる、唯一絶対の生命たる制約なんだ。だからスム、食事は良く噛んで下さいね。」

そついうとコギトは、僕の頭にそつと手を置きました。

「なんでそついうことになるのさ。全然分らないよ。」

僕は子供扱いされたのがなんだか力チンと来ましたので、少しむつとしたように言いました。

けれどもコギトはすっかり澄ましています。

「さあ、もう宿に行こうよ。」

本当はまだまだ物珍しい街を見て回りたかったのですが、またコギトに子供扱いされそうだと思いましたので、わざとまるで興味もないというふうに言って歩き出しました。

「密接な関係にあるのだけだなあ。まあどちらにせよ食事は良く噛んでとるようにね。さあ、スム。僕は宿の前に寄りたいところがあるものだから、先に行っていてくれるかい。」

コギトはまた何もなかったように言いました。

「寄りたいところってどこさ。」

僕はふて腐れてぶつきらばうに聞きます。

「少し買いい物をしようかと思ってね。ジャッタルイカの街で画が良く売れたものだから。」

コギトは画がとても上手なので、行く先々の街でそれ売って生活しています。

プラトーンの浸蝕が始まる前の世界を描いているらしいのですが、コギトの描くのは見た事のない生き物ばかりです。

けれど、どうやら蓬菜にはまだその生き物達がいるとコギトは言います。

コギトは決して嘘をつきませんし何でも知っていますので、きっと蓬菜は本当にあって、そこには本当に画の生き物達がいるのだと思います。

「では先に宿へ行きます。コギトは今夜も画を描くの。」

「ああ、そのつもりだよ。だからスムの部屋だけで良いからね。」
そう言いながらコギトは僕にお金の入った古い革の袋を渡しました。そうして気をつけるようにと言うと、コギトは人込みに消えて行きました。

しかしよくよく考えてみると、旅に必要なもので特に切らしているものはありませんしこれ以上荷物は増やせませんので、いったい何を買うというのだろうと、僕は今更不思議に思っておりまして。
するとギイリギリと荷車を引いた、筋肉質で身体のかな水屋のお

じさんが、心配そうな顔をして話しかけて来ました。

「ぼうや、一人きりかい。」

僕はそうだと丁寧^{ていねい}に答えて、宿を探していると話すと、おじさんは親身^{しんみ}になってあれやこれやと教えてくれました。

どうやらこの入口広場は電化製品の商いの最も盛んな場所らしく、各地から買い付けに来る機械屋ばかりで、僕のような子供が一人であるのはなんと珍しい事のようにでした。

そしてたいへんに弱った事に、おじさんが言うにはこの街には宿が幾つもあるらしいのです。

これだけの大きな街ですからよく考えたら当たり前ですが、コギトとはどの宿に泊まるのかまでは決めておりませんでした。

「それじゃあはぐれちまったって事だなあ。1番目立つのは、そろそこの煉瓦造りの建物だが、あそこのスープはどうにもよくない。使ってる水が悪い証拠さ。安くて飯のうまい宿なら、この機械広場

をくず鉄通りとは反対に真っ直ぐ抜けて、市場の外れにとびっきりのがある。まあ見てくれは良くないし、目立たないがね。それに料理の腕は確かだが愛想と口が悪くて頑固^{がんこ}なじいさんがいる。まあうちが水を卸してんだ。飯の味は間違いない。」

水屋のおじさんは腕を組んで得意そうにふんと鼻を鳴らしました。

「僕、見てくれは関係ないです。やっぱり水やご飯がおいしいのが1番なもの。それにおじさんは親切でいい人だから、おじさんの言う事は間違いなさそうだ。見つけづらくてコギトには申し訳ないけれど、僕そこが良いです。」

おじさんはワッハッハッと豪快^{ごうかい}に笑いました。

「よし、ではまず宿まで送ってあげよう。その後一緒にそのコギトという青年を探そうじゃないか。物騒な盗賊共が随分幅を効かせてるからな。最近ではデイドラの弓もこのへんに来ているらしい。」

おじさんは手を腰に当てて難儀^{なんぎ}そうな顔をしました。

「そんな申し訳ないです。まだお仕事なのにな。」

僕は慌てて言います。

「まあ、仕事といつてもこいつを引いて街中に水売って回ってるだけさ。今日は大きい仕事が無かったものでね。ウチでのんびりしようにも家内かないにどやされてしまうしな。」

おじさんはまた大きく笑いました。

僕も一緒になつて笑いました。

「スムと言います。よろしく願ひします。」

僕はまだ少し笑いながらきちんとお辞儀じぎをしました。

「殊更ことさらに賢い子だ。身体も頑丈がんじょうでよろしい。俺はカヤックだ。よろしくな。」

カヤックさんは感心した様子で僕の頭や肩の辺りばんぽんと叩きながら言つと、また豪快に笑いました。

なんだか嬉しくて、僕は少し得意になります。

「では僕もお手伝いしますね。」

カヤックさんの引いている荷車の後ろに回ると、思い切り押してみましたが、これがもう本当にビクともしません。

「はっはっはっ、スムにはちょっと重いかもしれんなあ。じゃあ荷車に乗つて水瓶みずがめを抑えてくれるか。縛つてはあるがどうにもボロでな。」

僕はすぐに荷車に乗りましたが、もつと重くなつてしまつて大丈夫なものかと心配になりました。

「しっかりつかまつてな。」

カヤックさんがぐつと前に体重をかけると、荷車はゆっくりと動き出しました。

カヤックさんの背中たぐまは、なんだかとても逞しく見えました。

五、水屋のカヤツク

ギイ、ガタゴト、チャプンチャギイゴト

荷車はカヤツクさんの機械広場と呼ぶ入口広場を抜けて、市場に入りました。

カザリゼの路面は随分しつかりと舗装されていますが、荷車の上にありますと小さな石のつぶてまで、ガタゴトと割にしつかりお腹をズンズンとやります。

僕はお腹がぺこぺこで喉もからからでしたので、そのズンズンと来るものがだんだん気分を悪くさせました。

目の前にはチャプンチャチャプンチャと良い音で揺れる水があつて、道の両脇に続く商店は見たこともないような立派な野菜やなんとも鼻の奥にひつつく良い香りの肉や魚の焼き売りなどが、それはもうずらりと並んでおりました。

後少し宿までの辛抱ですから、それまでなんとかこらえようと懸命に気を張っておりましたが、高級な鶏まで焼き売りされていたので、その香ばしい香りに僕はこれはもうだめだと、堪らずカヤツクさんに尋ねました。

「ごめんなさい、僕はどうやら喉がからからで、このままでは干からびてしまうというふうです。お水を一杯いただきたいのですが、おいくらでしょう。」

僕はコギトから渡された革の袋を取り出しました。

「ああ、すまんすまん。気が付かなかつたよ。お代はいいから一杯飲んでみな。」

カヤツクさんは荷車を押したまま振り向かずと言いました。

僕は大喜びでお礼を言つと、急いで水瓶の蓋を開けました。するとそこには、水面をキラリと光らせてチャプンチャチャプンチャと揺れる、なんと澄み切った清廉な水が瓶の半分程の所で波を打っていました。

それはあまりの美しさに飲む事を忘れてしまう程です。

「その脇にある杓で掬って、隣のお椀で飲みな。杓の先は水以外のもの触れさせないようにな。」

元氣良くはいと返事をする、僕は言われた通り慎重に杓で水を汲み、お椀に注ぎました。

お椀の中で水はまだキラキラとしています。

「カヤツクさん、本当にありがとうございます。」

僕はそのお椀いっぱいの水をもう一度にぐいと飲み干しました。

ゴキュリ、ゴキュリ、ツハアア

すっかりからからになつていた喉からずっと下までが、きゅうつと締め付けるように潤って、僕はもうなんとも腰が砕けたようになったのでした。

「おいしい、カヤツクさん、本当においしいよ。」

それはもう喉がからからだったからとかそういう問題ではない、今まで飲んで来た水とは明らかに違う水でした。

「がぁはっは、うまいだろう。ウチの水はちょっと違うのさ。」

本当にその通りでした。

「こんなによく冷えているのに、なんだかあったかくって、柔らかくって、身体中に染みてくるみたいだ。」

僕は興奮してあわあわと身振り手振りで言います。

「そうだ。それは、命の味さ。水はそもそも星の恵みだ。世界を巡り巡って全ての生き物を生かす最も慈悲深く清廉なものなのさ。だから人が精魂込めて清らかに清らかに蒸留すれば、水の中の慈悲が応えるんだ。その命の光を強めるのさ。そら、水面がしきりに光っているだろう。」

僕は黙ってキラキラと光る水瓶の中を、暫くぼおつと覗き込んで、命のあれこれをなとなしにぐるぐると考えておりました。

「さあ、そろそろ蓋をしめてくれ。今日のは随分出来が良かったな。こいつを蒸留した時ちょうど下の娘が初めて歩いてね。その喜びが水に溶けてるって訳だ。」

僕は蓋ふたを閉じながら目をパチクリとやりました。

「喜びが水に溶けるの。それで味が変わったりするのですか。」
カヤックさんは豪快ごうかいに笑います。

「そりゃあするさ。さつきも言ったが水は本来最も清廉ほんらいせいれんなものだ。人の想いのような強いものはすぐに溶け込んでしまふ。まあ飲んでどんな感情が溶けているのかまで分かるのは、俺達水屋くらいだね。」

僕はなんだかカヤックさんが格好良かっこうく見えてたまりませんでした。それから暫しばしくダカゴトと商店の間を進み、お店がまばらになって来た頃です。

「さあ着いたぞ。ここがその宿だ。おい、客人を連れて来たぞお。」

カヤックさんは荷車にぐるまを停とめ、大きな声で言いながら宿に入って行きました。

確かに見た目は少しオンボロの宿です。年期ねんきの入った木造もくぞうで宿としては小さめですが、なんだかどんと存在感がありました。

暫しばしくしてカヤックさんがまたまた豪快ごうかいに笑いながら出て来ました。その横には小さな丸眼鏡まるめがねのおじいさんがいます。

「おい、カヤック。客人たつてこりゃあほんの子供じゃあねえか。」
おじいさんはカヤックさんに怒鳴どなりました。

「じいさん、この子は特別だ。礼儀れいぎも正しいし水の味もよく分かる。ジャツタルイカから歩いて来たんだ。あんたところで休ませてやんな。それにお代をまけろって言ってる訳じゃねえんだ。文句はねえだろう。」

僕はすぐに荷車にぐるまを降りて挨拶あいさつをしようとおじいさんの前に立つとおじいさんは顔をぐいと近付けて、まじまじと僕の顔を見ました。

「はじめまして。スムと言います。よろしく願います。」

おじいさんは暫しばしく僕の顔を見ていましたが、ふいに入口の方へ向き直り言いました。

「ついて来な。部屋へ案内する。一人部屋でいいかい。」

先程より随分穩やかな声です。

「よし、荷物を置いてきな。おい、じいさん。二人部屋だ。もう一人いる。」

カヤツクさんはどんと僕の背中を押して言いました。

「よろしくお願いします。でも一人部屋でいいんです。コギトはいつもそうだから。」

不思議そうな顔をしているカヤツクさんをよそに、僕はおじいさんを追い掛けて宿の中に入りました。中に入ると宿を利用している人達が俄かに驚いたような顔でこちらを見えています。

「じいさん、子供じゃあねえか。子供を泊めるなんて珍しい。それともあんたの孫かい。」

数人のお客さん達は皆どよめき立っています。

「うるせえ野郎どもだな。わしの店に誰を泊めようがわしの勝手だあるうがい。それにこの子はカヤツクが連れて来た。ジャツタルイカから歩いて来たんだと。全くお前にもそれくらいの根性が欲しいもんだ。」

おじいさんは怒鳴り散らしながらカウンターで何か書類を書いているようでした。

「へえ、ジャツタルイカからねえ。まさか一人でかい。たいへんだつたろう。しかし確かに頑丈そうな身体をしている。顔も賢そうだし、目も澄んでいるなあ。こりゃあカヤツクのお墨付きも領けるつてもんだ。」

僕は一度にたくさん大人の人間に囲まれて、頭を撫でられたり肩を握られたりしたものですから、せつかくよく誉めてもらっているのにカチコチと石のようになってしまいました。

「スムと言います。ジャツタルイカからはコギトと二人できました。スムという名前はおじいさんが”澄む”という意味で付けてくれました。」

僕はなんだか真つ白な頭でまるで頓狂に答えてしまいました。

「はっはっはっ、そうかい。そのコギトというお連れさんは見えな

いなあ。しかしそれでも君のおじいさん、きつとエゾの出か、見聞ぶんのある方ではないかい。いや、こう見えても私は民族学者でね。」

お客さんの中の紳士しんしと見受けられる男性が言いました。僕はこういう事かと聞こうと思いましたが、おじいさんが書類しよるいを書き終おえて割わって入りました。

「サジナ。他人の詮索せんさくはいいが、さっきの昼飯でお前またケールを残したろう。今度やったら二度と飯は出さんぞ。」

おじいさんは紳士しんしのお客さんに食ってかかりました。

「勘弁かんべんしてくれよ、じいさん。ケールだけではどうしてもだめなんだ。自炊じすいなら我慢がまんするが同じ金を出して食べるなら、もうじいさんの作る以外の料理はともじやないが食べられないよ。」

紳士しんしさんはホトホト困こまり果はてています。

「なら夕飯のケールは食べるんだな。ほれ小僧、お前の部屋の鍵だ。さあ、カヤックが待ってる。荷物は運んどいてやるから早く行きな。」

僕は、おじいさんや観念かんねんしましたという顔の紳士しんしの男性や、皆さんにぺこりするとカヤックさんのところへ飛び出しました。

宿を出るとカヤックさんは桶おけを持ったおばさんに水を売っていたようでした。

「重いぞ。家まで持てるかい。」

「ありがとうね。大丈夫、すぐそこだから。本当にカヤックの水があると助かるよ。マリさんによろしく。」

おばさんはチャプチャプとやりながら小路こうじの角かどを曲がって行きました。

「お待たせしました。水売れたんですね。」

僕はカヤックさんに駆け寄りました。

「ああ、お得意さんだよ。最近は大きな仕事で手がいっぱい、市場方面まで回っていなかったからな。」

カヤックさんは水瓶みずがめの蓋ふたをきちんと閉めながら言いました。

「大きな仕事ってどんなお仕事だったのですか。」

「ああ、アイーダまで水を運んだのさ。先方さんが大型バギーを動かしたはいいが、乗り心地が酷くてね。全くまいったよ。それに水のために大型転おおがたころがすなんざ、金がかかってしょうがないと思うがね。毎回不思議に思うよ。」

カヤックさんがそう言い終わるか終わらないかという時に、俄にわかに宿の扉がバタンと開きました。

「小僧、最近は盗賊とうぞくが多い。いくらカヤックが一緒でも日が沈むまでに戻って来な。でなきゃ晩飯は抜きだ。」

おじいさんはそういうとまたバタンを扉を閉めました。

僕とカヤックさんは顔を見合わせて、わっはっはと笑いました。

「さあ、コギトくんを探しに行くか。日暮れまでに帰らないとあのじいさん本当に飯を出さないぞ。では水瓶みずがめは頼んだ。」

そう言っカヤックさんは荷車の向きをぐいと変えました。

僕はぴよんとそこへ飛び乗り、よろしくお願いしますと頭を下げました。

ギイッと音を立てて動き出した荷車の上では、大きな大きな水瓶みずがめが、僕のとなりでチャプンチャプンチャと嬉しそうに鳴っていました。

六、デイダラの弓

僕とカヤックさんは、コギトを探しながらカザリゼ中を回りました。

機械広場から市場、居住区きょじくの端はしから端はし、くず鉄通りまで時間をかけて見て回りましたが、コギトの姿は何処どこにも見えません。

途中何人もの人がカヤックさんに声をかけ、水を買ったり世間話せけんばなしをしたりしました。

カヤックさんはその度にコギトの事を聞いてくれましたが、誰も見たという人はいません。

確かにコギトは人込みひんごみの中にすうつと溶け込むのがなんとも上手ですし、会った人にはなるべく印象を残さないようにしていると云っておりました。カザリゼの表通りは何処どこも賑やかで活気ある人達で溢れていましたから、きっと余計よけいに見付からないのです。

しかしカヤックさんは本当に人気者で、その水の評判は街の隅々（すみずみ）まで知れ渡っているようでした。

居住区を回った際は特にすごく、通る人通る人みんな、大人から子供までカヤックさんに挨拶あいさつをしておりました。

居住区の中ではカヤックさんの家にも寄りました。

奥さんはマリさんと言つて、カヤックさんに似て豪快ごうかいで気立てきだてが良く、よく笑う優しい女性でした。

「そうかい、人探しかい。あたしやあてつきり、勝手に何処どこぞのちびを引き取つて来ちまったかと思つたよ。まあ無駄むだな酒を減らさせるいい口実くちぐつだと思つたがね。それに良い目をしている。残念だねえ、それとも旅なんて止めてうちの子になつちまうかい。」

マリさんはまるでカヤックさんと同じに、たいへん大きな声でどつかり笑いました。

「俺の酒をとやかく言つ前に自分の靴集くつめをなんとかあしやがれつてんだ。一体何足あると思つてやがる。」

カヤツクさんは小さな声で聞こえないように言いました。

「何か言ったかい。全くケツの穴の小さな亭主ていしゅを持ったもんだよ。妻が綺麗きれいにして何の不満があるってんだろうねえ、スム。あんたはスケールの大きな男になんな。」

マリさんはバンと僕の背中を叩きました。

「全くよく言っぜ。さあ、スム行こう。」

カヤツクさんはギイと荷車にくるまを動かしました。

「あんたお風呂は沸わかしといていいのかい。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

「はいよ。うんと熱いの沸わかしといてやるからとつと見付けて来てやんな。スムもまたおいでよ。」

カヤツクさんは振り向かずに手を振り、僕はペコリと頭を下げて荷車に飛び乗りました。

その後僕達は、くず鉄通りまで行きましたがやはりコギトの姿も、見たという人もありませんでした。

「まいったな。奴さんやつ何処へ行っちまったのか。あんまり期待きたいは出来ながちよつと高台からぐるりと探してみるか。」

カヤツクさんは知り合いらしいジャンク屋さんのお兄さんに頼んで荷車を預かってもらつと、くず鉄通りの奥の高台へ向かいました。

「お水、ごめんなさい。人に預けさせてしまつて。」

僕はカヤツクさんにとって水が特別大切なものであると感じていましたから、たいへん申し訳ない気持ちになりました。

「なあに、クレタは信頼出来る奴さ。あいつの扱うジャンク品はどれも旧世界の遺物いぶつばかりなんだが、誰にでも売りはしない。下手をすれば危険な力を持つちまう物だからな。相手がそれを買つてどうするつもりなのか、具体的には分からないがなんとなく感じるだそうだ。目を見ればな。文明崩壊以降ぶんめいほうかいのテクノロジー排斥思想はいせきしそつが薄れつつある今、あいつ程の目利きめきなら大儲け出来るだろうにな。本当の目利きめきは人を見る目もあるんだと。全く小癪こしゃくな事を言いやがる。まあとにかくそういう奴なんだ。あいつなら大丈夫さ。」

そう話すカヤックさんは、なんだかとても嬉しそうに見えました。高台に登るとそこにもほんの少しの商店がありましたがあまり広くはなく、その奥に高く張られた柵さくの向こう側は、大地の裂け目になっ
ていてどこまでも深い絶壁でした。

大地の裂け目は世界中あちこちにあって珍しくはありませんが、いったいどうしたら大地がこんなふう
に裂けるのか、僕はいつも不思議に
思います。

しかしここから見えるカザリゼの街並は、見たこともないような美しさです。

木造や煉瓦造り、白の土壁や瓦屋根など幾種類いくしゅるいもの建物の上で小さな太陽光発電のパネルがキラキラと光っています。

街の中央には一際大きな太陽光発電施設が街中を見据みすえるように立っ
ていて、その屋根は一面発電パネルで出来ていました。

たいへん小さく見える人々は皆活気に溢れ、プラトーンかわの渇きのことなど僕の頭の何処からもういなくなっているようでした。

コギトの言っていた”命と命が惹ひかれ合う”という言葉が、自然と頭を過ぎりました。

「確か砂避けすなよに束ねた長髪だったな。どれ居そうかい。」
カヤックさんは感激する僕の頭をわしゃわしゃとすると、目をくうつと細めて言いました。

僕ははつとしてすぐに懸命けんめいに目を凝らしました。

しかしどうにもコギトはいません。

本当に一体何処どこに行ってしまったのでしょうか。

すると俄にわかに、高台にいる人々がざわりとどよめき立ちました。

その人達が揃そろって目を向けている先は街の外です。

僕も高台の端はしに駆け寄ってみると、二列のバギーの集団がこちらに向かつて来ているの
が見えました。

その一列目は真ん中の一台を先頭にして、その左右から少しづつ一台一台後ろにズレて弧を描こいています。そのすぐ後ろを二列目が横一列にきっちり
と並んで走っていました。

後からゆつくりとやって来たカヤツクさんは、見るなり大声を張り上げて皆に知らせるように言いました。

「デイダラの弓だ。デイダラの弓が出た。誰か警備隊に知らせてくれ。」

その瞬間高台の上は大混乱になりました。

逃げ惑う人やカヤツクさんの指示通り警備隊や街中に知らせようと走り出す人、或いは祈ったり泣き出す人もいました。

「みんな落ち着けえ。大丈夫、カザリゼには優秀な警備隊がいる。街の男衆も自警団を作って街を護る。商人の心意気があんな盗賊連中に負けるものか。さあ、まずは落ち着いて家へ戻るんだ。念のため荷物を整理してくれ。」

高台の上にいた人々は少しだけ落ち着きを取り戻し、ざわつきながらも皆速足で家に帰って行きました。

しかし親子と見られる女性と小さな女の子が高台の片隅にぽつんと残っておりまして。

女性は地べたにしゃがみ込み震えて祈っています。女の子はそれをなんとも心配そうに見ておりました。

それに気付いたカヤツクさんはゆつくり近づくと、膝をついて落ち着いた声で言いました。

「カナン。そうか、お前さんは亭主を盗賊にやられたんだったな。気持ちには分かる。だがなカナン。今は震えて祈っている時じゃあねえ。その手はこの子を抱きしめるのに使ってやんな。お前さんが護ってやるんだ。お前さんは今頼るものがないと思えて、神様が亡くなった亭主に頼っているのだろうが、この子にとっちゃあお前さんだけが頼りだ。分かるな。今自分に出来る事するんだ。お前さんにしか出来ない事があるだろう。さあその子を抱えて家に帰りな。そして荷物を整理するんだ。」

女性はしばし怯えた目でカヤツクさんを見ていましたが、大きくこつくり頷くと、深呼吸をして女の子を抱き抱えました。

そしてカヤツクさんに深々とお辞儀をして力強く駆け出しました。

「さあスム、お前も俺と来な。コギトくんは心配だが、街の誰かが匿^{かくま}ってくれるはずだ。」

僕はあまりに突然の事で頭が真っ白でしたので、とにかく言われるままカヤックさんについて行こうとしました。

すると俄^{にわ}かにけたたましい銃^{じゆう}声^{こゑ}が気でも狂^{くる}ったように暫^{しばし}く鳴^{ひび}り響^{ひび}きました。

カヤックさんと僕は高台^{たかい}の端^{はし}の柵^{さく}に駆け寄りました。

「やっぱり駄目か。本当に弾^{たま}が当たりやしねえ。」

いつの間にか街の前をぐるりと囲^{かこ}っていたたくさんの警備隊が、近付いて来たデイドラの弓に対して発砲^{はつぱう}したらしいのですが、バギーの群^むれは全くなともないというふう^{じゆうたん}に走り続けておりました。その時ふと、何処かの街でどんな銃^{じゆう}弾^{だん}も決して当たらない盗賊団がいると聞いたのを思い出しました。

「さあスム、ウチに行くぞ。俺はその後自警団に行かなきゃならねえ。」

僕は分かりましたと言おうとした瞬間、胸がドキリとしました。

警備隊の中から、誰かがたった一人、デイドラの弓に向かって歩いて行きます。

「コギトだ。」

僕は一目散^{いちもくさん}に外に向かって走り出しました。

「コギトだつて。おい、スム。待て、何処へ行く気だ。」

カヤックさんも慌^{あわ}てて追い掛けて来ましたが、人混みを擦^すり抜けいく小さな身体に、追い付けるはずありませんでした。

僕は閉まりかけている門を潜^{くぐ}って警備隊の列に紛^{まぎ}れました。

何の考えもなく飛び出してしまいましたので、しまった追い返されると思いましたが、警備隊の人達は飛び出した僕に何の反^{はん}応^{のう}もありません。

理由はすぐに分かりました。

コギトです。

姿勢は同じですが、コギトが実に重々しく、異^い様^{よう}な雰^{ふん}囲^い気^きを放^{はな}つ

ているのです。

それは理屈りくつを超えて、警備隊の足を止め、僕にコギトの名前を呼ぶ事も忘れさせました。こんなコギトは僕も初めてです。

そうしていると自警団を連れてカヤックさんが物凄ものすごいい勢いきおいいでやって来ました。

「スム、何やってやがる。こんな所に来たら．．．。」

カヤックさんも、自警団の人達も皆言葉ことばを失うしないました。

「ありゃあ、なんだ。あれがコギトくんだったのか。」

カヤックさんが振り絞しぼるように言いました。僕はそれに頷うなづくので精一杯せいいつぱいです。

すると、コギトから少し距離きょりをおくようにして、デイドラの弓がのっそり止まりました。

そして先頭の一人が、バギーから覚束おぼつかない足どりでまるで苦しそうに降りてきます。

「あんたあ、何もんだ。本当に人間か。」

男はこの空気の中で、たった一人動けるようでした。

七、マクスウェルの魔物

たくさんのバギー達もそのモータを止め、辺りに響くのはびゅうと抜ける風の音だけです。

大柄おおがらの刺青いれずみだらけの盗賊から、列の一番奥でぶるぶる震えている痩やせっばちの商人まで、ここにいる全ての人たちが息を呑のみ、その目をコギトからちらりとも逸そらせずにおりました。

「僕はコギト。君の名前は。」

コギトはゆっくり穏おだやかな口調くちやうでそう言つと、右手をすうつと男へ向けます。

男はコギトの一つ一つの言葉やその動きを過剰かじように警戒けいかいしながらも、精一杯になんとも堂々と答えました。

「俺は、シオドスだ。」

シオドスは名前を告げると、バギーのドアをボタンと力いっぱいに閉め車体の前へ出ました。

コギトはほんの微動びどうだにもせず続けます。

「シオドス。いい名前だね。ではシオドス。先程まで君が使ってたその腰の大きな装置は、思念しねん壁発生機へきはうせいきだね。それが使えるという事は、まず間違いなく、誰かにオレイカルコスを埋め込まれた筈はずだ。いったいどうして誰に埋め込まれたんだい。」

コギトはいつになく重々しい声で言いました。

僕にはコギトの言っている意味がさっぱりと分かりませんでした。が、恐らくカヤックさんも、ここにいる全員がそうであったように思います。

「さあてね。あんたに答える義理ぎりはないさ。それよりあんた、一体何をした。うちの奴らもそいつらも誰一人動かねえし、ひどく息がしづらい。」

シオドスは額ひたいに汗を浮かべて、首に巻いていた砂避けすなよのスカーフを乱暴に外しました。

「心配ない。何もしてはいないよ。何かしたというなら、僕という命を隠^{かく}していいだけさ。さあ、とにかく答えておくれ。聞かせてくれるね。」

コギトはズい的一步前に踏み出しました。

シオドスはなんとも説明の付かないその圧倒的な何かに、堪^{たま}らずじりじり数歩下がります。

「いいだろう。教えてやらあ。俺も詳しくは知らないが、白頭^{しらがしら}って呼ばれている博士だ。しかしあんた、何故それを知ってやがる。」

コギトはシオドスの言葉を聞いたその途端^{とたん}に、目をぐつと閉じ、少しうつむいたようにしました。

「やはりカルテシウスか。ああ、なんという事を。」

コギトは悲しみや、或^{ある}いは絶望といった気持ちで心をなみなみと満たしたようななんとも苦しそうな表情になりましたが、すぐに小さく息を吐き、また落ち着いた顔で続けました。

「ああ、どうか聞いておくれ、シオドス。君に埋め込まれたオレイカルコスしねんへきは小さい。恐らく米粒程の大きさだろう。さっきの思念壁せつじよの規模きぼを見れば分かるんだ。その大きさならまだ間に合う。切除出せつじよ来るんだ。」

それを聞いたシオドスは、ひどく驚いたような顔を見せ、なんとも言葉にならないというふうでした。

すっかり動揺どうようを隠せない様子でしたが、暫^{しば}くの間口を嚙つくんでから、ぐいとコメカミに中指を当てて見せました。

「確かにこれを埋め込まれてから、あちこちおかしい。長くは持たねえ予感よかんはしてるし、助かるなら助かりたい。だがな、人間かどうかわからない程異様な雰囲気を出してやがるあんたを、どうやって信じるってんだ。」

シオドスは腰の装置にすばやく手を当てました。

「何かしてみる。この装置で空間の断列だんれつを創^{つく}って、あんたもそういった全員真^まつ二つだ。」

シオドスはいへん怯^{おび}えて見えます。

コギトは少し慌^{あわ}てた様子で、説得するように言いました。

「どうか話を聞いて欲しい。君は本当に助かる。カルテシウスには実験台にされただけだ。いずれは彼もオレイカルコスを取り出しに来るが、必ず命も奪われる。その前に切除^{せつじょ}してしまうんだ。大丈夫。僕を信じて。君は必ず助ける。」

コギトがそう言うのと、辺りを覆^{おお}っていたただならぬ雰囲気は、すうっと水が引くように消えていきました。

僕達は俄^{にわ}かに呼吸が楽になりましたが、場の緊張は変わらず続いておりました。

「大丈夫。これで信じてもらえるかい。僕は君の状況と似ているんだ。だから良く分かる。まずはその装置を捨てておくれ。この街の人々を決して巻き込んではいけない。」

シオドスはカタカタ震えているようでした。

「本当に助かるのか。」

今にも泣き出しそうな声です。

コギトはこっくり深く頷^{うなず}きます。

「約束だ。君は必ず助ける。」

そうしてまた暫^{しばし}くの静けさの中、シオドスの小さく震える指先が、一瞬装置から離れたように見えました。

その時です。

僕の隣^{となり}の警備隊員が、まるで自身の怯^{おび}えをがっさり振り払おうと、
いうように俄^{にわ}かに叫びをあげました。

「うわああ。銃は効かんぞお。切り掛かれえ。」

そして男にか、或^{ある}いはコギトにか、まるで狂ったように切ってかかっていきました。

それに続いて全ての警備隊員が、それはもう谷底から吹き上がる突風^{とつふう}のように一斉^{いっせい}に猛^{たけ}り狂^{くる}い出しました。

「続けええ。命をかけてカザリゼを護^{まも}るんだあ。」

そうしてまるで呼応^{ひおう}するように、デイダラの弓の団員達も皆荒々しく猛^{たけ}り声をあげました。

「やってみやがれ、腰^{こしめ}抜け共お。」

辺りはあつと言う間に戦場の様相^{ようそう}に一変^{いっぺん}しました。

するとその只中^{ただなか}のシオドスは、震える手で装置をがっしりと掴^{つか}み、その目は再び獣^{けもの}のようにギラリとしました。

「悪いがあんたとは行けない。」

シオドスはコギトにそう言い放つと、目を閉じてじっと何かに集中しているようでした。

するとシオドスを中心に、辺りの雰囲気^{ふきみ}がキンと張り詰^つめて行きます。

「やめろ、やめるんだ。」

コギトは大きな大きな声で叫びました。

シオドスはカツと目を見開くと、ニヤリと不気味^{ぶきみ}に笑いました。

そしてそれが起きたのは、シオドスの腰の装置が青白く光ったように見えた、正にその時でした。

「やめろおお。」

ごおう ごおおごう

ほんの一瞬の出来事でした。

コギトの声と共に、シオドスは激しい真つ赤な炎をあげて燃え上がりました。

誰もが再び言葉をなくし、その一切^{いっさい}の動きをぴたりと止めました。そしてしばしの沈黙^{ちんもく}の終わりに、自警団の男の一人が声を震わせてけたたましく叫びました。

「魔物だあ。マクスウェルの魔物だあ。」

その言葉を合図に、辺りはたいへんな混乱に包まれました。蜘蛛^{くも}の子を散らすように、そこにいた全ての人が叫びながら逃げ惑^{まど}っています。

デイダラの弓の団員も、バギーで逃げだす者もおれば、バギーも忘れて走って逃げだすものもありました。

「デイダラが本当の魔物を連れて来ちまったんだあ。」

警備隊と自警団は、我^{われ}先に門を開き中へ中へと逃げて行きます。

そうしてその中の数人の男達が叫びました。

「何してやがる、カヤツク。早くその子とこっちへ来い。焼き殺されちまうぞお。」

しかし僕もカヤツクさんも、もうその声もまるで聞こえず、ただただ呆然と立ち尽くしているばかりでした。

「ちくしょう、あいつらはもう駄目だ。諦めるしかねえ。」

その言葉を最後に門が閉められるドオオンという音が響きました。そうしてその場に残ったのは、僕とカヤツクさん、コギトと燃えているシオドスだけでした。

すると俄かに空が暗くなり、赤く燃える炎が不気味に揺れて見えました。

ポツ、ポツ、ポツ、ポツポツ

赤土の濡いた地面に、シミのような斑点があちこちに現れます。

「雨。」

僕は小さく呟きました。

雨はすぐに一面を包みました。さあああっという静かな雨音が、辺りに美しく響きます。

既に男の姿を留めてはいないその炎は、雨の中でも消える事なくぼおつと燃え続けました。

コギトはそれをびしょ濡れで立ち尽くしたまま、ただただ黙って見つめておりました。

カヤツクさんは何を思ったのか、地面に溜まった雨水を手で掬いほんの少し口に運びました。

そうしてコクリと飲み込むと、たいへんに苦しそうな声で言いました。

「ああ、なんて悲しみだ。彼だ。彼が泣いているんだ。」

雨ではつきりとは分かりませんでした。コギトを見つめるカヤツクさんが、僕にはその時泣いているように見えたのです。

そして僕自身も、止まらない涙が後から後から訳も分からず溢れて来るのでした。

八、暗闇の星明り

「その後僕は、コギトのそばへに駆け寄りました。コギトは淋しそうな顔で、自分が恐くなつたかと僕に尋ねましたので、僕は黙って首を横に振りました。

そしてコギトはいつものみたいに、僕の頭に手を置いてくれました。

するとカヤツクさんがやって来て、僕達が街を出るための算段を立ててくれたのです。

僕の荷物はカヤツクさんが取りに戻ってくれて、僕とコギトは街の外にあるカヤツクさんの浄水場で待ちました。

その間コギトはほとんど黙ったままで、僕も何も聞けずにいました。

その頃にはもう雨も上がり、日も随分暮れていました。

僕はカヤツクさんを待つ間、窓の外を見ながらコギトの事ばかりをぐるぐると考えていましたが、いくら考えてみても僕にはもう何をどうして良いのかすっかり分からなかったのです。

ですから、もうぐるぐるとどうしようもないところまで考えた末、コギトが自分から話をしてくれる時まで、僕はただコギトを信じて待つようにしようと決めました。

そうするとなんだか少し胸の辺りのもやもやしたものが楽になって来て、自然とカザリゼで出会った色々な人たちの事を考えられるようになりました。

カザリゼは本当に素敵な街で素敵な人たちばかりでしたので、きちんとお別れの挨拶が出来なかった事や、カヤツクさんの水を使った宿のおじいさんの料理を食べられなかった事などが、今更本当に残念に思えておりました。

そして暫くしてカヤツクさんが、僕の荷物と革袋いっぱいのお水と、マリさんのお弁当を持って来てくれました。

コギトは深々と頭を下げ、お金を渡そうとしましたが、カヤックさんはそれを受け取りませんでした。

その後カヤックさんとお別れをして、僕達は真っ暗な夜の力ザリゼを、アイーダに向かって歩いて出発したのです。

これが力ザリゼであつた事の全部です。」

辺りはすっかり静まりかえり、窓から吹き込んでいた風はいつしか冷たくなっておりました。真っ白いレースのカーテンがそよそよと小さく揺れています。

黙って話を聞いていたアマンダさんは、ふうとため息を吐きました。そうして僕を優しく抱きしめて、棉わたのような声で言いました。

「辛かつたでしょう。」

僕はアマンダさんの優しさが、なんだか急に胸を締め付けるといふふうでした。

「ありがとう、スム。ありがとう。」

アマンダさんは僕の頭を何度も柔らかく撫なでてくれました。

僕は心の奥の方からなんだか熱いものが込みあげて来て、堪たまらずに声を出して泣き出してしまいました。

「恐かつた。恐かつたんです。優しい街の人達に大好きなコギトが魔物と呼ばれて、人が目の前で死んで、それはコギトがした事で、でもコギトはすごくすごく悲しそうで、なんだか世界がもう真っ暗になつてしまつたみたいで。」

僕は溢れて来る感情をただそのままに口にしておりました。

「スム、あなたは本当に、本当に立派よ。こんなに小さな身体からだで、コギトを受け止めようと必死になつて。お蔭かげでコギトは、本当に救われているわ。でもね、スム。忘れないで。あなたはまだ大人に、私達に甘えていいのよ。」

そうして僕は、アマンダさんの胸の中で疲れ果てるまで泣きました。アマンダさんは黙つたまま、いつまでも僕の頭を撫なで続けてくれていました。

ああ、どれくらいの間泣いていたでしょうか。

泣き疲れた僕はアマンドさんから離れて、すみませんと小さく謝りました。

「あら、案外人あんがいの話听不懂の子ねえ。甘えていいのだと言ったでしょう。」

アマンドさんは今度は僕の頭をくしゃくしゃとしました。

僕がうれしくって笑い出すと、アマンドさんも一緒になって笑ってくれました。

「では食事にしましょう。よくて、好き嫌いなくたくさん食べるのよ。男の子なんだからうんとね。昼間に作り損そこねたパイもあるし、鶏肉とりにくもたくさんあるのだから。」

ドアを開けると賑にぎやかないい香りがどつとやって来ます。すると僕のお腹はぐうと応こたえました。

「アマンドさん、もしかして昼間は食事の支度をしてくれていたのに、僕が寝てしまったからそのパイが駄目になってしまったのですか。もしもそうなら本当にごめんなさい。」

僕たちは部屋を出て、お腹を擦さすって階段を降りました。

「いいえ、コギトがあなたが寝てしまったと言いに来てくださいましたから。オープンに入れる前で本当に良かったわ。私、得意なのよ。それに、コギトが寝かせてあげて欲しいって。」

階段を下りるとヒゲの男性が立っていて、厨房くわふとは反対の奥の部屋に案内されました。

するとそこにはたいへん大きな机があつて、その上には豪華いじな料理がたくさん並べられておりました。その真ん中には立派な鶏肉がどんと置かれていて、それはもう堂々としたもののなのです。

僕は一瞬目を円まるくしましたが、これはいけないと思い直ぐさま言いました。

「こんな豪華で立派ですごい食事は申し訳ないです。特にあんな立派は鶏とりは、ものすごく高いのだと、おじいさんから聞いています。」
アマンドさんは少しびっくりして言いました。

「あらあら、本当にしっかりした子ね。有望ゆうぼうな助手だこと。明日か

ら楽しみだわ。言いたい事はよく分かるけれど、子供があまり遠慮するものではなくてよ。さすがに毎日これは出せないけれど、今日は私達が出会ったお祝いですからね。それにこの鶏はあなたに食べさせてあげて欲しいって、コギトが持つて来てくれたのよ。この街ではこんな立派なのは手に入らないから、きつとカザリゼから持つて来たのね。」

ああ、あの時コギトはこれを買に行っていたのだと、僕はなんとも言えないおっと温かい気持ちになりました。

「そうそう、紹介するわ。ここの宿を取り仕切ってくれています、ジャンバニです。おヒゲがチャーミングでしょう。」

ヒゲの男性が、ずいとお前に出ました。

「はじめまして、ジャンバニと申します。先程既にスム様の寝顔は拝見しておりますので、どうか心知れた者として接して下さいれば光栄です。日々アマンド様の奔放さに心身を砕いておりますが、必ず諸々お力添え致します故、些細な事でも結構でございます。なんなりとお申し付け下さいませ。」

ジャンバニさんは深々と頭を下げました。

「ありがとうございます。よろしく願います。」

お二人の温かさが滲みるようで、僕はそう言うのが精一杯でした。「ジャンバニ二つたらせつかくおヒゲを誉めたのに。いつもああやってつつくの。さあ、そろそろいただきますしう。私もお腹が空いてしまったわ。ほら、席に着いて。スムが主役なのだから、座っていただけないと私も食べられないのだけど。」

僕はなんだかまた泣き出しそうでしたが、懸命に堪えながら黙ってペコリと頭を下げ、席に着きました。

「さあ、召し上がれ。」

アマンドさんにはっこり笑って言いました。

「いただきます。」

僕はたいへん勢いよく食べました。

お肉がおいしいです。

スープがおいしいです。

サラダがおいしいです。

パンがおいしいです。

パイがおいしいです。

お水がおいしいです。

僕は本当にいつまでも勢いよく食べました。

アマンダさんはゆっくり食事を取りながら、それを黙って優しく見ておりました。

僕はあつという間にお腹がいっぱいになり、もうちつとも動けないというふうでした。

「ふふふ。満足いただけたみたいで何よりだね。お気付きかしら、ここのお水、カヤツクさんの所のお水よ。あんまり美味しいものだから、研究用に取り寄せたものを食事にも使ってしまったの。」

僕はたいへんびっくりしましたが、どおりでおいしい訳だとなんとも納得したのです。それと同時に、あの宿のおじいさんの料理もきつとこんなにおいしいのだろうと思えて、なんだかたいへん嬉しい気持ちになりました。

「ではお風呂に入って今日はもうおやすみなさい。支度が出来たらジャンバニの所にね。お風呂に案内してくれるわ。」

僕はごちそうさまを言って部屋へ戻ろうと、階段の手すりに手をかけました。するとアマンダさんは僕の名前を読んで、座ったままゆっくり優しく話し出しました。

「もう何百年も前に、パラケルススという歴史的にも偉大な学者さんがいました。その学者さんは変わり者だったけれど、本当にたくさん業績を残したわ。私達全ての学びの道を行く者は、みんなこのパラケルススの偉大な業績の上で学んでいます。そのパラケルススがね、終生口にしていたと言われる言葉があるの。」思いは伝わる。山も谷も海も、時間さえ超える。阻めるものは何もない。」現に彼の思想や学問への情熱は、時間を超えて私達に受け継がれているわ。だからきつとあなたの思いも伝わるわ。だから今夜は安心し

て、ゆっくりとお休みなさい。」

アマンドさんはそう言うとお優しく笑って、ティーカップにゆっくりと紅茶を注ぎました。

僕はアマンドさんに、ありがとうございますとおやすみなさいを言くと、部屋に戻ってベッドにドツカリと横になりました。

ひんやりと冷えたシーツと風が、本当に気持ち良いです。

窓からはただ真っ暗なだけの空に、小さな星がポツリポツリとあちこちで光って見えておりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3507p/>

コギトの雨

2011年10月8日00時37分発行